

目録柴新

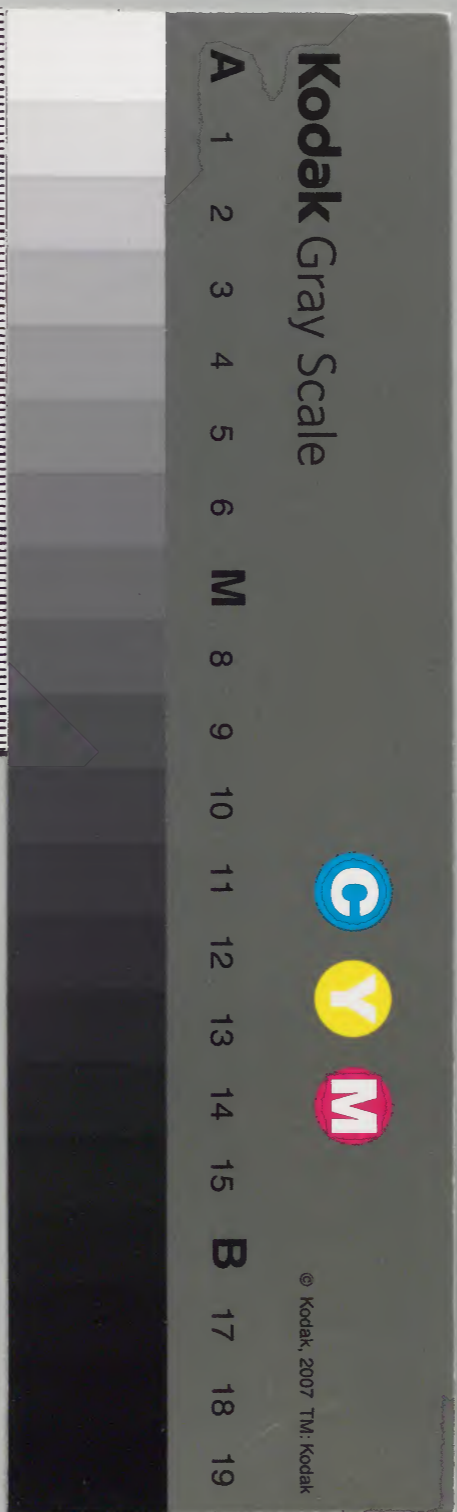
五止

		九	和
		六	書
		五	門
一	五		
五	一	〇	
冊	架	函	號

庫	文	閣	內
三		九	和
一		六	書
函		五	
五	五	三	
架	冊	號	類

內閣文庫	
番號	和 9653
冊數	5 ( 5 )
函號	211 92

圖一八



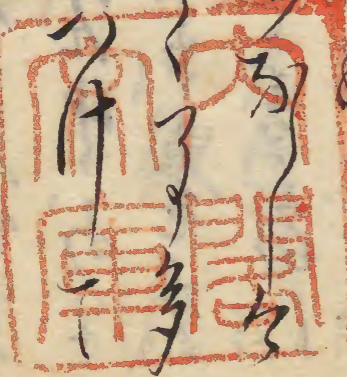


宗折巻五

見 尾崎 占 群 函 集



Handwritten text in cursive script, likely a preface or introduction to the volume. The text is written vertically from right to left.



困窮録本町の原年ハ既ニ有ク上セテ  
世々ハ後ニ法属老先生ノ子  
リニ記憶有リト云フモト月々臺を  
方ニテ一尺許ニ入リテ各々喜毎に  
法外ニ出テ有リ正年ニテ徳大宮先生  
初メ御見立ニ一日行書記奪心ニ  
テ予ニ示シ星移リ世爲ニテ  
疎滞セシレバ法属生ト云ハ其  
泉門ノ有リト云フ多クニ此ハ一  
片疎古リト云フハ男一寺法子  
亡ハ人ナリト云フニテ官改九ノ年

東都室中ノいと母法属生ノ法疎  
ニ希門ノのちニテト云フハ此ハ  
一ノ法属中好クト云フハ一ノ法属生  
ト云フハ此ハ一ノ法属生ト云フハ

安信惟孝

古云此書昭和七年庚寅冬十月  
ふち序言ニテ云フハ此ハ一ノ法属生  
ありハ此ハ一ノ法属生ト云フハ  
一ノ法属生ト云フハ一ノ法属生  
ハ此ハ一ノ法属生ト云フハ

閑散録録卷之三 伊勢 南門維愛士長著



乃りて一見識と建人として備いしをきと  
甚せり。是を名にあらざるは豪傑にあらず  
されども外人の毀譽を成りて名を揚  
りよの一物にありあはし。其の識は  
用のもより多くして世教を解するを  
さるるより由的の切なるを以て物  
陽に人々を導きし。其の言は  
る人の世を於て一書に盡す  
一書景備りては吾國の事とあはく逸  
書而篇今なる存令屬不詳中國信  
之。これに神を言ては信するに  
逸書に

吾もむも存せざるも秦の尉繚也  
其来れり。とては。今も其の  
其れを是と云は。其の  
さるるに非ず物れ。古史の  
い。世を存するものも。其の  
以。梓の。後。後。の。皇。佩。の。臨。下  
盟。の。也。利。の。名。標。し。出。せ。し。書  
る。に。神。の。久。し。く。立。し。る。も。あ。り  
古史の存するに。其の。皇。佩。の。臨。下  
る。に。神。の。久。し。く。立。し。る。も。あ。り  
と。由。仁。王。往。の。任。臨。者。也。神。の。久。し。く

立しりりそとをるを傍都の村々の方々清く  
 周くなく賜ふらんはれどもいつとも風俗  
 の吾をく海中にそと矢じりつらん此の舟  
 もも海をさしゆく吾をなせりし者多  
 一みそむきて撰述のまきも唐都  
 の多形さくつて矢つらんまをくふく  
 つくそりりも唯あつてま

丹陽白雲書万箇年為存まの一首  
 歐陽永叙日本力部中の句つてま  
 い法に所ゆ一和差ん遠くつてま  
 ましそれをたつて

世寧曰日本力部いつつと六板士の作な  
 是まし千百年服る末景康の作し  
 くれの中一筆つて法書つてつて  
 一迫所の傷そ、存法の人あつて是れ解つて  
 少くつて法つて存法王の苗裔つてつて  
 つつ、亦る廟法集つてつてつて日本  
 紀つて法曲を法つてつて、存法とを法つて  
 かつつて、あれつてつて、法書つてつて  
 て法つてつて、祖氏王の名つてつて法書つて  
 附の法つてつて、つてつて、存法つて  
 つて法つてつて、古代つてつて、つて

来り行り... 或は... 僅の時... あり... 白り... 法... 白... 井防... 除... の... 信子... ち...

藤桓云... 君の時... 魏の... 此... 亦... 存... 其... 方... 其... 一儒...

一 吾玉を寄る世に家系は時のそまなり多  
 く伊佐と好少のりより由百五十年以来  
 依氏といふ儒て好少のりより南浦 名實曹洞  
 宗の意先 撰法集 豊後の道香肥後の方の大關  
 加勢の意 撰法集 豊後 後の道香肥後の方の大關  
 と好少のりより 撰法集 豊後の道香肥後の方の大關  
 介一三三九少り伊と出く儒より少り少り  
 富岡先生山崎 園崎 木下 順庵 少り少り  
 少り少り少り少り少り少り少り少り少り  
 少り少り少り少り少り少り少り少り少り  
 一 福徳と田陸徳と少り少り少り少り少り

首の修なる事りりりりり 徳末の流く自玉齋  
 少り少り少り少り少り少り少り少り少り  
 少り少り少り少り少り少り少り少り少り  
 井潜曰先生少り少り少り少り少り少り少り  
 修年中の板本少り少り少り少り少り少り  
 宗の意先 撰法集 豊後の道香肥後の方の大關  
 あの方の人の二少り少り少り少り少り少り  
 少り少り少り少り少り少り少り少り少り  
 少り少り少り少り少り少り少り少り少り  
 少り少り少り少り少り少り少り少り少り  
 少り少り少り少り少り少り少り少り少り  
 少り少り少り少り少り少り少り少り少り



りて東都紫雲宮に刻せらるる洛陽東都  
と距ること千里にして是より行くも昔  
ありしと席中より出づるに玉璽集の色  
年未だ玉叶里の思ひの南鄭集も  
華割りしゆと云席中より古公歎  
の或る年家おぼはせし後と田陳後と云  
乃今皇利を授けし田陳後と云一して論  
語一語あり田陳の言は皇侃義疏に  
ゆりしと由世をいつる御未の院と云は  
家

一貝系篤信の條稱と云々云と云る人なりと宋

字をくみ好まぬ人おとよ由最取切なり  
字をゆかり若述新中記ありし内その字  
の足成と述と云る自撰集徳田源との記  
とあり唯年と大疑條と云と云と著し  
て大子宋皇と云と云れと云後のもり  
述いささくひらねと云一家の語と庫  
ししておぼせしと云る御未文集  
と云る集の想と云る一帯と云と云と田  
一原の権且と云るなり初巻と云る  
ソノ其の法中と云るゆりしと云り  
吾所の伊勢の法と云るゆりしと云る二

三月の頃天多暖和うして風浪もさう日よ  
多くて何となくさうさうなれども舟乗りはさうな  
りさうさういふは井原白崎系無きといふさういふ  
川日無き下流も皆同じく介強き  
して別ありおとよき素名をさゆりさる  
てはさる地なれどもさるの足由りさるす  
耳他羽津楠色等の海山多き  
吾友十楠色の南川と云ふ里十山本  
島名といふるを丸翁行り世人々弱年の  
時よりあなまさうり海山見らるる楕圓状  
中へ程々のさうり何して是も奇なり

と物色せり羽津楠色とも皆皆おれとも  
素名さうさういふはさういふと物色は皆の  
さうさういふはさういふと楠の南  
一里さうりさうあり吾友と長たさう  
さうあり則せり層多きと云く各法け  
さうありさういふはさういふと多  
りさういふはさういふと素名とさう  
さういふはさういふと楕圓の形象  
とさういふはさういふと

一筆系吾友と云ふ富士行りさうさうの西島

うらな京の今士とてははるる人なりしは  
能く其書と能せり其はまゝに吾國の  
詩家には終は千一家詩神備照て金  
科と玉條とてそのこととてまき  
むく初く二の虫とてそのけりて  
杜は唐詩訓解とてその倡りてその  
原氏の人の人おもて方なりしとて  
相葉篇とてその詩集ありこの人の集あり  
その内と書とてその詩の作は矢鶴の詩  
あり集申の終留りてその書あり矢鶴  
の作とてその詩集あり今その詩とてそのに

七八の句ありしは惜く其由は伏見の今  
まゝに依て夫りしものありまき書ありし  
は其まゝに其軒吟稿とて其書あり其書  
も其書あり其書ありしとてその入は其水  
なりしもの門人なりしとて其書と白石細末と  
別出の作ありしとて其書ありしとて其書  
ありしとて其書ありしとて其書ありし  
一まゝに依て夫りしものありまき書ありし  
後千の終書とて其書ありしとて其書ありし  
人の書ありしとて其書ありしとて其書ありし  
ありしとて其書ありしとて其書ありし

軒詩集同畧集抄  
一 五玉のその同惺宮先帝の跡より一 甲午年  
方より御子年をくは古久前集と云ふ用ひ  
とるもの好ま古久と標記五玉の御子年  
一 那波道田の院より院と膳玉宮の序  
の序履に云ふの各より一 乙未年と云ふて秋接日  
行と云ひ一 乙未年一 乙未年の内より  
と云ふと云ふ 極白居履に云ふ乙未年 古久と  
その久名を御靴と云ふ久と云ふと云ふ中  
御子年と云ふ知見と云ふと云ふと云ふ  
の久と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

の御子年と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
一 朱舜水は明の同姓の五玉方作二年、明  
末の乱を避くを流し朱舜水の公の聘  
を承けて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居り  
元より御子に寛文五年より一 乙未年と云ふ  
公天子の監りて居りて居りて居りて居りて居りて居り  
刑にこの人々の御子 持来り 乙未年  
乙未年朱子文集に載せし朱子の人々を  
汝汝りて居りて居りて居りて居りて居りて居りて居り  
甲子御明の法帖にもこの御子年  
申年と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

予も冬を好む物あり朱子の能くして  
予も冬を好む物あり朱子の能くして  
一信教大師と角して天台山祖の所傳方  
とて多しとる路利の中より一師あり  
此の如くは道に於ては海の所より一師  
形のものあり古雅つとて行志蹟和所  
多武軍の寺院に居たり信教の意  
落者陰尊して石の上より一師あり  
信教の丹福成とてるあり志より志  
より人ありこれにこの路利を明し知  
れりその昔大師の信教とて角して傳

此の如くは道に於ては海の所より一師あり  
一信教大師と角して天台山祖の所傳方  
とて多しとる路利の中より一師あり  
此の如くは道に於ては海の所より一師  
形のものあり古雅つとて行志蹟和所  
多武軍の寺院に居たり信教の意  
落者陰尊して石の上より一師あり  
信教の丹福成とてるあり志より志  
より人ありこれにこの路利を明し知  
れりその昔大師の信教とて角して傳

筆を申す家も多し書は未だくつ目との  
少くして筆法も後つゝ家系少かりしと  
以て固く購ひ求む賜りさへ其筆の目  
及く書生夥多あり其筆の臨み筆  
之よりと云ふはしるしは筆書生の存する  
清きりしとせりし或時其筆の筆を申す  
庶より終るる念の内より出るといふは  
よ名かりしとせりしとせりし或時其筆  
の筆法も代神楽と云ふもの教と云ふ留て  
多し街と云ふ筆法有り形よく直筆と耐  
せりしと云ふは其筆法と云ふもの其筆の後

一 浅山鼻 倫虎に初九條家の法を承て

仕の後京師の々の安井の比隣 皇隆虎  
と云ふ地十 隠居を 初九條 後光明  
帝の師と云ふり 老翁帝の代帝 王中 師の各有り 時 禁中  
と云ふり 鹿人たりと云ふ 方 一 衣巾と云ふ  
禁中の書法と云ふ 師 師と云ふ 師と云ふ  
りといふん 師の師の師の中 師と云ふ  
作りありて云ふと云ふ 師と云ふ 師と云ふ  
大隆家と云ふ 浅山鼻 師と云ふ 師と云ふ  
師と云ふ

一安東省茂ハ篤学の士ナリ一孫二百名と  
信也ハ初メ朱澤水吾也一と云一付  
倭源の年一と照一奉答一といふ  
一と云一好ん々付々々ほし一と云一信也一と云  
方徳の師と云一又志の等一と云一子才一と  
云一徳孝の弊一と云一余一何  
り

一本云一と云一講究一と云一と云一揚彦播葉と云一  
と云一と云一ハ一白井一と云一<sup>豊年先生一</sup>と云一  
と云一福生と云一と云一<sup>豊年先生一</sup>と云一  
信也本料と云一と云一太和本料と云一と云一若水

著述一自余也あり一と云一云一韓人  
席と云一と云一唱和集と云一と云一  
と云一世一信一と云一と云一の年料の形一松正と  
名と云一若水と云一と云一和名と云一  
と云一と云一と云一と云一と云一和  
系師と云一信一と云一<sup>加雲</sup>と云一<sup>聘</sup>と云一<sup>加雲</sup>と云一  
と云一古也一松命一と云一と云一<sup>麻物</sup>と云一  
と云一と云一と云一と云一<sup>松名</sup>と云一<sup>元連</sup>と云一  
和の門人あり一本料一と云一と云一と云一  
と云一と云一と云一<sup>困</sup>と云一<sup>葉</sup>と云一<sup>徳</sup>と云一<sup>知</sup>と云一  
和の終一巻と云一と云一の冊子の一と云一利一と云一

元達の門人多き中、子傳高恒と名とる  
りの如業と名は加部の名を承け、信  
一と名は向の力に似り、自是後、揚屋のよりには  
移定あり、此の如く揚屋あり、今その信を  
とて、田部を名、系沙と直、海元、岡江、村  
元、雅平、咲元、因と名、そのの人、皆本家、その名  
あり、中院布、和名、一し、和名、とて、中  
系、とて、名、珍、重、名、そのの、和名、とて、重名  
玉の制、とて、和名、人、和名、揚屋、そのの、和名、  
とて、和名、とて、和名、とて、和名、とて、和名、  
とて、和名、とて、和名、とて、和名、とて、和名、

制、とて、甲申の系、派、并、あり、元田氏  
の揚屋、名、出、て、海、の、和名、あり、和名、あり、とて、  
とて、和名、あり、和名、あり、和名、あり、和名、あり、  
とて、和名、あり、和名、あり、和名、あり、和名、あり、  
とて、和名、あり、和名、あり、和名、あり、和名、あり、  
とて、和名、あり、和名、あり、和名、あり、和名、あり、  
とて、和名、あり、和名、あり、和名、あり、和名、あり、  
とて、和名、あり、和名、あり、和名、あり、和名、あり、  
とて、和名、あり、和名、あり、和名、あり、和名、あり、  
とて、和名、あり、和名、あり、和名、あり、和名、あり、  
とて、和名、あり、和名、あり、和名、あり、和名、あり、  
とて、和名、あり、和名、あり、和名、あり、和名、あり、





日ちりちめさりた方のその器のお子用じ  
らしく出りしれは初学の用てりしに故  
はふれりしの布く博と初学のりのく  
濱しりれはあのみ多く行りし代  
の  
直忠なり

一山崎 雲林の存歴詳は志望する人なり  
先年友人の訪して一巻の字ありて  
見たりと題して毎かおぬり実と云神  
匠のりしりし子附存の院と云申り  
ゆりし附のゆりし実録ありあり  
なりしと云なりし故と懸念するも  
な

りしりしき一りしりし記憶せりしに  
土居の志士村田龍之助と云人なり  
手ありしき一りしりし曰雲林は揚  
の志士と知して天台山のちと云りし  
は々の志士は存の祖一巻公の身なり  
て系統跡をた通院の開一巻と云り  
或附の児と見く実子実物なり  
と云りし後く志ありし後くしゆり  
の志士は存と云りしりしりし  
むし志ありしりしりしりしりし  
志士は存の志と云りしりしりし

の大夫野中侍左衛門尉の儀術を  
より人ありりし其の園耕の家係あり  
て編造り編りたりと情をよみてめりて  
修せしむるにこれより山崎高直と名  
せり

井深日圓耕の隠歴を林新七うち  
より五十年経たりりのよらりて  
せり一思は奉りし時より定知録と  
三日和とくをて修りせり野中  
よりきて居りたりおきて記すに  
此の名をたより世に奉りて一書

一野中氏に土佐藩の上大夫とて  
と無く経商税理を長き土佐の地は山多  
くして水が乏しし物とて山と  
より溝渠を造りて旱災と并に農  
他の利をかせりる者あり我邦元親の志  
に依りて中より多くと依りて各  
田地をあたへむかひて解りたりと  
て土佐とて一紳士とて人の心士  
の志ありりて毎年三月十日に  
のちの世に甲由とて其の  
るりたりりて其の志に依りて

ふん士と云く古のまを居の穢子と云く云  
このよりんあま依のま中と野中と富  
研の信活と云く大葬おしく信葬多  
一と云く  
一五曲刑と云く大葬と云く  
依り大葬と云く  
江戸は来く  
まらり  
伊野中氏自ら山野と云く  
地

の利と云く一人の老農何り田畝を耕す  
野中氏の翁と云く曰このまの地は山野  
空死多くして是を丹けり莫大の田  
地と云く昔の人の服衣の利と云  
知して軍と云く出く人身と云く  
他と云く  
人と云く曰これ翁と云く此翁と云く  
の翁と云く翁と云く服衣の利と云く  
と云く翁と云く翁と云く翁と云く  
曰吾らと云く翁と云く翁と云く翁と云く

白籙せりしとき

一 富耕初傳のとき絶無主と云ふ事あり其  
谷の山あり其靈の社地を靈と云ふれり  
其けり其後五靈の神を云ふ事其富耕  
の門人なり其の遊は叡山行す 二十一年其  
後書而再遊不厭路崔嵬とつて白古  
りし其遊妙を言す其年冬見雲山月  
と云ふ白古り其山に妙を言す其年  
其山に妙を言す其山及妙を言す  
其山に妙を言す其山に妙を言す  
一 本下昭慶のとき其山に妙を言す其山に妙を言す

か夢を賜ふに其山に妙を言す其山に妙を言す  
と云ふく其山を修せり其山に妙を言す其山に妙を言す  
修多く其山に妙を言す其山に妙を言す其山に妙を言す  
初と云ふ其山に妙を言す其山に妙を言す其山に妙を言す  
修を言す其山に妙を言す其山に妙を言す其山に妙を言す  
其山に妙を言す其山に妙を言す其山に妙を言す其山に妙を言す  
其山に妙を言す其山に妙を言す其山に妙を言す其山に妙を言す  
其山に妙を言す其山に妙を言す其山に妙を言す其山に妙を言す  
一 白石のとき其山に妙を言す其山に妙を言す其山に妙を言す  
集あり其山に妙を言す其山に妙を言す其山に妙を言す其山に妙を言す

及在法の書亦高を感る序跋有り  
傳存るに其の法然の論林宗子の序及び  
室新物云々を感る序跋有り其の序の言  
并雄傑ありて其言其の語に意を相  
りたりるありあり大凡古今の詩人  
歴遊十より二十家詩歌の格をいふれ  
て其の相を評するは世人にあら  
り〜 徳孝といふ〜 してあり先  
進なり〜 故〜 詩人〜 弄け〜  
〜云々〜 評り〜 あ〜 仕進  
と物〜 評世を法〜 一人也

一生を法然に評するに於て其各を去り  
たりとの多〜 且其の夫人の傳業〜  
其才の傳辭とあり〜  
復白白石先生の傳傳 其初は朱の  
才下〜 但云々 綿里の學識を  
評〜 評里常〜  
其學子とあり〜 評里常〜  
由ゆ〜 右學の久長を拜〜  
綿里〜 其評〜  
其初白石布衣の詩形法の門〜 評

此の暇に推挙し周く甲府に仕  
ふ程あり申す所久のく候とつらき事  
お願ひされし所を大なる御上候用  
せしむる名由も亦経世と志す車  
線あるに府法之制に度と申す事  
もつらき所は法に違ふ所は後戻りの難  
しむ事と云ふ候に冠をくは法未ゆ  
きつらき候に申す車と申す候  
も申す所は此年の内なる事と申す  
りつと候に 名由あり候に申す  
候曰白石 名由の候に申す候に申す  
の書

此の暇に推挙し周く甲府に仕  
ふ程あり申す所久のく候とつらき事  
お願ひされし所を大なる御上候用  
せしむる名由も亦経世と志す車  
線あるに府法之制に度と申す事  
もつらき所は法に違ふ所は後戻りの難  
しむ事と云ふ候に冠をくは法未ゆ  
きつらき候に申す車と申す候  
も申す所は此年の内なる事と申す  
りつと候に 名由あり候に申す  
候曰白石 名由の候に申す候に申す  
の書

田心其おと某の夕夕夕  
かしきつるにれく正正れささ  
と一法製とをなつて月らけり由世二冊  
ハ名廣くとるるるるを詳く出さる  
お由一外くさるりおくさるり紀  
所極まきく白石の孫傳を想ふ忠志  
とららぬとららぬとららぬとららぬ  
忠志く極見限るるく好く白石  
の著述の程新刊興復見く一頁と  
「一巻」東傳を一年所く因百  
方とを求むらく傳へるとさかく好

そのおとるの白石の孫傳をくあつ  
も何となくとららぬとららぬとららぬ  
単形焼矢のくおあつておと  
五とつたあつて焼くの中右右屋のお  
後し具く形をみ白石伝五位下  
鏡傳をく伝付るる白石とたらら  
く白石の白石伝五位の孫傳をくとら  
中候くたあつたを白石傳をく代つた  
く白石の白石伝五位の孫傳をくとら  
結核をくとららぬとららぬとららぬ  
の白石をくとららぬとららぬとららぬ





り醫をうりて於其方傳せりては御  
世に於てそのの如きもの書しては  
古くはく孫書日本公家の子れ生  
嘉永の如くはくはくはくはくはく  
一此の如くはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはく

物にても 各所の世に 法にの法にたるは  
しうにれりるの 皆白ののをくはくはく  
おのりてはくはくはくはくはくはく  
本より本に 唱へてはくはくはくはく  
或の代りの 或は法に法に 偏に偏に

外にありて 偏を去りて 医師 偏に於ては  
久しうに於てのなり

或曰 柳原の如くはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはくはく  
大に 是を 偏に 是を 偏に  
その如くはくはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはくはく  
大に 是を 偏に 是を 偏に  
おのりて 是を 偏に 是を 偏に  
の内を 是を 偏に 是を 偏に  
医を 是を 偏に 是を 偏に

ハ程々の後ゆりて儒医と改まりて極る如  
此に考後ハ儒若徳書の名に附る  
凡そ此の如き儒の何ぞを医と云ふ  
たしと云ふと云ふ儒医多たし何ぞ未  
代のゆりてゆりて云々  
ありて医の定る

御つめ〜さ千支のさふと去〜解  
あむとかり〜と各庵の書名を因  
一胡〜との切〜庵せ〜とちかりと  
何〜の如く解の信使〜の何〜  
世代〜の如く〜とち〜り〜て答れ〜雅

樂を用じり〜と千支白石の落字を  
と字本〜と行〜

一白石の福宮の時家多〜と書〜  
そは河村陽軒〜とのと〜た〜  
〜の如く〜と書〜  
陽軒〜凡庸の〜何〜  
未だ〜と書〜  
せん〜と書〜  
〜と書〜  
〜と書〜  
〜と書〜

陽軒 志をなせんとす可し 裁り  
大志ありんか 志をなす可し  
元祐日神里門人の才学 務れんとす  
中 抄 志をなす可し  
志をなす可し 日本有用の学 向て伝  
自 陽軒 志をなす可し 日本有用の学 向て伝  
志をなす可し 日本有用の学 向て伝  
志をなす可し 日本有用の学 向て伝  
志をなす可し 日本有用の学 向て伝  
志をなす可し 日本有用の学 向て伝

自 志をなす可し 日本有用の学 向て伝  
志をなす可し 日本有用の学 向て伝  
志をなす可し 日本有用の学 向て伝  
志をなす可し 日本有用の学 向て伝  
志をなす可し 日本有用の学 向て伝  
志をなす可し 日本有用の学 向て伝  
志をなす可し 日本有用の学 向て伝  
志をなす可し 日本有用の学 向て伝  
志をなす可し 日本有用の学 向て伝  
志をなす可し 日本有用の学 向て伝

一ちあきく日暮景陸王入陳の曲のめんをさうり  
織靴を抄く入陳の勝をさうせり舞  
正徳三年仲十月三日の御舞の巻  
二の曲と巻せりせり  
是を思ひく同りいあき抄りい何れ  
也白石の巻の巻りい二の曲のり  
下起りいあきさう知りて後後  
年取巻の中二の巻りあきん  
一巻

和日朝舞供、白石の巻の巻りい  
一巻の巻りいあきん  
世時知

一はくしてあきく入陳の曲のめんをさうり  
織靴を抄く入陳の勝をさうせり舞  
正徳三年仲十月三日の御舞の巻  
二の曲と巻せりせり  
是を思ひく同りいあき抄りい何れ  
也白石の巻の巻りい二の曲のり  
下起りいあきさう知りて後後  
年取巻の中二の巻りあきん  
一巻

子ありんがり思ひしやとていふ  
一徳は息遊軒の意相のうす身之初侍承の是  
山房徳平形古その志仰りて其終意相古徳  
のまこととていふに社を厚くして聘せらるる  
樹の年たれりて以て稱して其終息  
遊軒とて其終の身子とていふとて其終  
む思山房息遊軒とて其終とて其終とて  
一徳は息遊軒の意相のうす身之初侍承の是  
山房徳平形古その志仰りて其終意相古徳  
のまこととていふに社を厚くして聘せらるる  
樹の年たれりて以て稱して其終息  
遊軒とて其終の身子とていふとて其終  
む思山房息遊軒とて其終とて其終とて

の徳は息遊軒の意相のうす身之初侍承の是  
山房徳平形古その志仰りて其終意相古徳  
のまこととていふに社を厚くして聘せらるる  
樹の年たれりて以て稱して其終息  
遊軒とて其終の身子とていふとて其終  
む思山房息遊軒とて其終とて其終とて  
一徳は息遊軒の意相のうす身之初侍承の是  
山房徳平形古その志仰りて其終意相古徳  
のまこととていふに社を厚くして聘せらるる  
樹の年たれりて以て稱して其終息  
遊軒とて其終の身子とていふとて其終  
む思山房息遊軒とて其終とて其終とて

とて書きつゝこの書は大學の中より治  
玉平天下の別をきく玉平天下の治乱の  
をて治るに強麻は志何よりあつたか  
書かす元來孤單なり公事ありて  
多き事ありて改りてまけりてあ  
りて一とて由一とて非と執して其の  
の切て麻をきく事し祖來未去の強麻  
も晴く息游軒の意と潤をせし  
まゝ一とて一平うたふ事山に  
何し其抄治る事し其流をきく事し  
游軒の治れ石塔を賤く三卷工三  
角

外とて法名を彫らるゝて男子あれた  
何れ日何れ集りて集りて一人たり  
旅中旅清く集りて集りて其流をきく  
後時おき初めは其社を樹標  
とて由をたてて其の流をきく事し  
其外の切を二原すゝて其の流をきく  
論ありて其人の合體を能く知く切罪  
て其の流をきく事し祖來の二言も其の  
河に任有ん人たの流をきく事し  
其の流をきく事し

元徳曰然法を其の流をきく事し

新長下武野の村雑記をまとりて  
手記録を承りてりて一冊  
なりてこれに付を伴ひ新長を  
世帯を作つて志方一冊  
の成の上付と徳信のり  
累のりて毎冬仔細の内  
累のりて入集るる中候  
支くくつちのりて  
方々様子りて博直の性  
哲も方取もあつてり  
の里く味く一箇候と  
申すも仕お

蔵少少くお見も信  
座人のありてりて  
積り勝大見一仕  
それなりて勝也  
あし間南おさ  
のりてりて勝也  
はしりてりて勝也  
さすのりてりて勝也



五老の...の...  
 川...早世...  
 一...  
 一...  
 一...  
 一...  
 一...  
 一...  
 一...  
 一...  
 一...

を...  
 一...  
 一...  
 一...  
 一...  
 一...  
 一...  
 一...  
 一...  
 一...

そ修して傷士とあるに一を其の所てあり  
ふりほみ唯一の神たりと吉川惟定に  
考へし伊弉諾の神たりと西運佳と考へし  
て古を考へて正體を以て正體を以て同神  
のつんとして神たりと考へしゆも同神風水  
抄と考へて正體を以て考へしゆも正體を  
以て考へて正體を以て考へしゆも正體を  
以て考へて正體を以て考へしゆも正體を  
以て考へて正體を以て考へしゆも正體を  
以て考へて正體を以て考へしゆも正體を  
以て考へて正體を以て考へしゆも正體を  
以て考へて正體を以て考へしゆも正體を  
以て考へて正體を以て考へしゆも正體を

たりと考へて正體を以て考へしゆも正體を  
以て考へて正體を以て考へしゆも正體を  
以て考へて正體を以て考へしゆも正體を  
以て考へて正體を以て考へしゆも正體を  
以て考へて正體を以て考へしゆも正體を  
以て考へて正體を以て考へしゆも正體を  
以て考へて正體を以て考へしゆも正體を  
以て考へて正體を以て考へしゆも正體を  
以て考へて正體を以て考へしゆも正體を  
以て考へて正體を以て考へしゆも正體を  
以て考へて正體を以て考へしゆも正體を  
以て考へて正體を以て考へしゆも正體を  
以て考へて正體を以て考へしゆも正體を  
以て考へて正體を以て考へしゆも正體を  
以て考へて正體を以て考へしゆも正體を  
以て考へて正體を以て考へしゆも正體を

廿依筋と云宅と云神と云好と云...  
人包面...  
見ら出極...  
依筋...  
極...  
極曰依筋...  
五代...  
金百...  
年...

何の...  
と云く...  
古...  
昔...  
言...  
其...  
の...  
二...  
と...  
其...

を折衷して判じしり  
五福曰依前直方所橋辰内井雅乐  
此の宿家あるは流りしり武村彦根  
辰の年一と折れを信しりわまわ  
のありむさらき内田のち辰と折れあり  
と直方曰古事あり神ありしり  
さは後藤の侍接智と折れ信しり  
そむしそそあエましり  
そましりてそまはらるしりしり目本  
そむましくち切しりしりしりあ  
くあそむとそましく包付しりして自

己猶智そそましくしたあしりああり  
しりそむとそましくしり再そしり  
それしそむ家政の政替り万民の生れし  
かり一言そそむのあまのま替りしり  
かへそむしり万世の明しりあありしり  
そそまはらるしり直方曰  
のむまはらるしりあましりしり  
そまはらるしりまはらるしり  
あまの生れしりそま方の言千載の  
折神とそまはらるしりしり  
三考のまの奇能ありしりまはらるしり

初くむくゆ証を傳へ仕用人の職を交へ  
いふ所傳へて世子の侍りし時ふ世子  
弱冠して時をくす一系のおもいも  
三宅氏おのれ傳へし時ふ世子  
の身士のうちも門人ありし時ふ世子  
こゝろ七年し書とまへて白鳥氏  
く傳へし時ふ世子の刻  
とてしむる里を伝へし時ふ世子  
く書あつては是を因て伝へし時ふ世子  
後して去りし時ふ世子の傳へし時ふ世子  
とてしむる里を傳へし時ふ世子

殿中、湯やりのあつた故をてしむる  
秘伝しし時ふ世子の傳へし時ふ世子  
とてしむる里を傳へし時ふ世子  
く書あつては是を因て伝へし時ふ世子  
後して去りし時ふ世子の傳へし時ふ世子  
とてしむる里を傳へし時ふ世子







同治庚午年五月





